



# 在原業平・小野小町

目崎徳衛

筑摩書房



日本詩人選 6 在原業平・小野小町

昭和四十五年十月二十五日第一刷発行  
昭和五十年十二月二十日第六刷発行

著者 目崎徳衛

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
電話東京二九一―七六五一(代表)  
振替東京六一四―二三郵便番号一〇―一九一

印刷 明和印刷 製本 鈴木製本

©1970 目崎徳衛

目崎徳衛(めざき・とくえ)  
歴史学者、俳人。聖心女子大講師。大  
正十年新潟県小千谷生れ。東大文学部  
卒。著書「平安文化史論」「紀貫之」

(分類) 1392 (製品) 13206 (出版社) 4604

目次

在原業平

三

小野小町

二六

古今的なものについて

二四二

業平・小町和歌索引



在原業平



渚の院にて桜をみてよめる

世の中にたえて桜のなかりせば 春の心はのどけ  
からまし

渚院址を探ねたのは、早春の曇日の暮方であった。大阪府枚方市の京阪電鉄御殿山駅に近く、古い屋並と新築の家々が雑多に入混っている一角に、院址はわずか三、四十米平方ほどの貧寒な遊園地と化していた。淀川の「渚」もかれこれ一キロ近く遠ざかり、昔を偲ばせるのは「渚院址」と彫られた小さな石柱だけであった。遊園地の一隅に、元ここにあったはずの観音堂の鐘楼だけが残っていて、梵鐘の銘文に「寛政八年辰年四月 願主渚院先住法印権大僧都興善」という文字が、辛くも読み取れる。

枚方一帯は古くは「交野」と呼ばれていた。それは桓武天皇の外戚として栄えた帰化人系豪族百濟王氏の本拠地で、今も渚院の東南、枚方市中宮に金堂、東西二塔などの礎石を遺す百濟



寺址や、その隣の百済王神社は昔の名残である。桓武・嵯峨兩天皇はしばしば雪を侵して交野へ遊獵に行幸し、百済王氏の盛大な迎接を受けた。落院は初めそのような場合の行在所としてでも造営されたのであろうか。その名のように淀川の渚に臨み、松の緑の丘を負い、桜や梅の前栽もある風雅な離宮であった。「伊勢物語」八十二段には、

むかし、惟喬親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人（業平）を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒のみ飲みつつ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜ことにおもしろし。その木のもとにおりあて、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。

と、歌の背景を美しく描いている。「時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり」などと、故意に業平の名をはぐらかした所に虚構の跡がみられるにしても、大体の雰囲気はこの通りであつたらう。

惟喬親王は文徳天皇の第一皇子である。しかし、衰退しつつある名族紀氏出身の更衣静子を母としたために、太政大臣藤原良房を外祖父とする弟の惟仁親王（清和天皇）に越えられて皇太子となれず、不遇な境涯を業平や紀有常を伴つての風流に託したが、やがて独り比叡山麓に隠

遁して一生を終った。その生涯はいずれ詳しく触れたいと思うが、交野の渚院がどのような経緯で惟喬親王に伝領されたのか、あるいはたまたま狩の行宮として借用されただけなのか、具体的なことは何も分らない。近世初頭の古典学者北村季吟（「八代集抄」）は「惟喬親王の山荘なり」と断定しているが、たしかな根拠はないと思う。

しかし交野の桜狩がたとえただ二、三度のことであったとしても、なお「世の中に」の名歌と伊勢物語八十二段の存するかぎり、渚院が日本の文化を愛する者にとつて大切な場所の一つであることは、言うまでもないだろう。たとえ「太平記」巻二俊基関東下向事の、「落花の雪に道迷ふ、交野の春の桜狩、紅葉の錦被て帰る、嵐の山の秋の暮、一夜を過す程だにも、旅路となれば物憂きに」に始まるあの有名な道行のうちの、一方の嵐山の賑いには比べるべくもないとしても、交野の名所のこの極度の寂れ方はどうしたことか。

道路に面して、観音堂の退転した跡を利用したものらしい、「渚之院会館」という公民館風の新しい鉄筋二階建があつた。玄関の硝子扉に、「本日の村山リウ先生の源氏物語の講義は、都合で明日に延期されました。婦人学級」という張紙がみえる。「源氏物語」を熱心に聴講する婦人たちは、光源氏のイメージの一部ともなったに違いない業平とこの土地の貴重なゆかりについて、どれほどの知識を持っているだろうか。そして伊勢・源氏と並び称せられてきた古典の一方の主人公の遺跡が、こんなにも荒廃してしまったことについて、どのような関心を持

っているだろうか。わたくしは同行した筑摩の川口さんと顔を見合せた。

そういえば、数年前に天理市櫛本いちのもとに在原寺ありわらでらと伝えられる旧跡を探ねた時も、今はみすぼらしい小祠こでしが残るだけで、しかも境内は無残にも廃品置場となっているのを見た。近くをバイパスが通るといふ話だったから、今はその小祠さえ滅びたかも知れない。世々の歌びとへの評価が急激な転換を起さない限り、業平の跡を探ねることは忘却と荒廢いたを傷むことに他ならぬ。旧東海道丸子の宿しゆくに、芭蕉の一句に付けこむ「とろろ汁」の自家・本舗が軒を並べているような俗化ぶりよりも、それはまだ増しなのかも知れないが。

在原業平（八〇）の歌は、十世紀初頭に勅撰された「古今和歌集」に三十首収められ、それが彼の確実な作品の大部分を占める。三十首という数は、十世紀初頭の古今撰者紀貫之百二首、凡河内躬恒六十首、壬生忠岑三十五首と、撰者の同時代人僧素性そせいの三十六首には及ばないが、「六歌仙」と呼ばれる九世紀半ば頃の名手の中では、小野小町の十八首、僧正遍昭の十七首を凌ぐ。業平は「古今」の「古」に属する歌人の中では、最高の評価を受けたのである。

従四位上行右近衛権中将兼美濃権守在原朝臣業平は元慶四年（八八〇）五月二十八日、五十六歳で世を去るが、正史「三代実録」は評して「略才学無きも、能く倭歌を作る」と記した。彼の歌人的地位が生前すでに確立していたことが分る。国学者賀茂真淵（伊勢物語古意）は、

渤海国使を鴻臚館（平安京に設けられた外客接待の客館）に迎接した程の業平が、詩文の才に欠けていた道理はないとして、「略才学有り」の誤りと断じたが、それはかえって最良の引倒しであろう。「三代実録」を編纂した大儒菅原道真等からみれば、業平の詩文能力などは物の数でもなかつたに違いなく、それに引き替え、和歌をも解した道真の眼に、業平の歌人的天才は光彩陸離たるものと映つたであろう。「三代実録」の評語は簡潔で正確なのだ。

しかし三十首の多数を古今集に採られたのは、一面からすれば撰者の中心人物紀貫之の深い業平敬慕の現れでもあつたと思う。貫之の「土佐日記」には、土佐守の任期果てて帰京する道すがら淀川を遡る条に、

かくて舟引きのぼるに、渚の院といふ所を見つつ行く。その院、昔を思ひ遣りてみれば、おもしろかりける所なり。しりへなる丘には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。ここに人々のいはく、「これ、昔名高きこえたる所なり、故惟喬のみこのおほんとも、故在原の業平の中將の、『よの中にたえて桜の咲かざらば 春の心はのどけからまし』といふ歌よめる所なりけり」。

と、しみじみと追慕しているのだ。

古今集が勅撰されたのは業平の死後約三十年を経た頃であるが、業平の歌のみに、他の人の場合にはほとんど見られない異様に長い詞書が付いている。それが業平の生前あるいは死の直

後に成立した彼の家集にそのまま存したのか、あるいは家集から発生した歌語り、つまり現在の伊勢物語の原型となった資料などから採られたものかは、今も多くの研究者を悩ましつけている難題であるが、とにかくそうした異例の体裁を敢てしたのは、貫之たち古今撰者が一世代前の業平朝臣を「みやび」の理想像と憧憬していたためであろう。

そうした理想化・伝説化は、その後の一世紀間に一層深まり、やがて現在の伊勢物語に定着した。その過程で古今集にみられない多くの歌が、主人公「昔男」の詠として挿入された。そして鎌倉時代初頭に完成する「新古今和歌集」やその後の勅撰集などは、それらの大部分を業平の作として採録した。しかし、わたくしの意図は、伊勢物語の造型した昔男の虚像とかなり隔りのある、歌人としての業平の実像を描き出そうとするにある。だから、採り上げる歌は、確実にこの歌人の仕事とみられる古今集の三十首を主とし、古今集より約半世紀後に勅撰された「後撰和歌集」にみえる数首を、幾分真偽を危ぶみながら附加するに止めなければならない。勿論歌人業平の実像と伊勢物語の主人公との大きな落差にも、随所で触れるつもりである。後者は物語の成長に参加した今は名も知れない複数の作者たちの、卓越した、あるいは卓越しすぎたとも言えそうな手腕の結果なのであるが、物語化の核心となった業平の詩人的資質を、物語から逆推することも不可能ではないからである。

わたくしはこの本の冒頭に「世の中に」の歌を選び出した。それは歌人業平の特質が比較的過不足なく捉えられる一首だと思ふからである。いわばここで序説的に「世の中に」の歌をめぐってかれこれ言い、次いで業平の伝記的叙述に即して順次に歌を挙げてゆこう。従来業平については、「三代実録」の卒伝（しゅつでん）（死亡記事に附記された略伝）の、わずか二百四十字ばかりの記事が唯一の史料とされ、それに加えて伊勢物語の虚構がほしきままに利用されていた。業平のこのような茫漠たる虚像をどの程度改めることができるか、そして虚像の昔男とどのように異なる歌人像を組立てることができるか、それは作業を終つてみるまではわたくしにも予測しがたい。さてこの歌は、試みに窪田空穂（くぼたうつほ）（古今和歌集評釈）の逐語訳を引けば、こんなことになる。

世の中に、もし一向に桜の花がなかつたならば、春の季節におけるわが心は、落ちついて、のどかなものであるう。

何という興醒めする歌意であろう！ しかし、どうか性急に意味を捉えようとせずに、むしろ意味など度外視して幾度か口誦（くちう）んではほしい。無残な語釈を拒絶する深い哀愁が、豊饒な調べを通して胸に滲（しみ）み入っては来ないだろうか。

「春の心」は直接には業平自身の心を指すが、さらにはすべての人々を包み込むあの物憂い春の季節感を、重層的に表現している。その否定しがたい共感が一首の余情を呼び起す。この余情は、眼前の桜という景物をレンズのような透明な眼で捉えただけでは生れない。短かかるべ

き花のいのちに付けても、わがいのちの寂しさを哀しみ愁えざるを得ない、心情の深みから仄めき出すのだ。

業平が哀愁の詩人であることを、否定する人はまずあるまい。しかし半面見逃してはならないことは、彼が単純に抒情に溺れていたのではなく、新しい手法と素材の野心的な開拓者でもあったことである。たとえばこの歌の、まるでロジックのような修辞。「なかりせば——」のどこからまし」と、現実には有りえない条件を設定して、その仮定への回答を彼は書く。それは業平以前にはほとんどみられなかった詠法である。以前の歌というものは、パトスを端的に吐き出すだけであった。勿論「万葉集」にも「ただにおいさのみ正述心緒」以外に「ものによせておもいきのみ寄物陳思」「ひゆゆ譬喩」の手法もあったが、なまの感動をこちたき理窟や言葉の厚化粧に塗り込めてしまうことはなかった。もし業平が溢れてやまない情念に欠けていた人なら、奇を衒う表現もごまかしの道具として必要だったかも知れない。しかし彼ほどに実生活を過剰な情熱の犠牲にした詩人はいない。なぜそらぞらしい論理的構成などで、溢るる抒情に反逆する必要があったのか。

思うにそれは平安初期の半世紀を風靡した唐風のおおりであった。六朝・大唐の詩文は言語のすぐれて知的な本質を貴族たちに教えた。言葉をくしびな言靈の現れとする信仰が過ぎ去りつつある時だけに、ひとたび海彼の詩文の絢爛たる修辞に魅せられると、素朴な和歌の表現はみすばらしいマナリズムとしか見えなくなった。それ故しばらくの間和歌は宮廷の内外から姿

を消してしまふ。弘仁・承和じやうわの詩文への熱中。しかしもどかしい外国語の駆使では表現しきれない心の衝迫が失せぬかぎり、歌はいずれ復活しなければならぬ。

言語の知的本質に対する洗礼を受けた人々が、恋の贈答、酒宴の即興、悲喜さまざまな感懐など、成熟する貴族生活の場合々に必須な媒体として、ふたたび和歌をかえりみた時、彼等にはもはやあの素朴な抒情ではない、言葉のあたらしい衝撃的な関係の創出に賭けなければならなかった。なまな感情をたくみなウィットに包みこんで、優雅な会話のように交換しようとする、厄介なしかし愉快な作業が詩心を駆り立てる。業平はこの曲折した新しいテクニクスの先駆者であった。

そうした手法がすっかり身に付いてしまった時点で書かれた「古今集かきよ仮名序」は、「在原業平の歌は、その心あまりて、詞ことば足らず。しほめる花の色なくて、匂ひ残れるがごとし」と、いささか無慈悲な批評を加えている。「世の中に」の一首などは正にこの批評の適例だと、国学者契沖ちきゆう（古今余材抄）も真淵まぶち（古今和歌集打聴）も尻馬に乗ったように指摘している。しかし貫之の氣負った酷評は、これを裏返しにしてみれば、先駆者業平が未熟な新技法に覆い尽せない豊饒な詩魂を抱いていたことを示すものだ。彼の表現はたしかに舌足らずで難解だが、それは小手先の技巧によって情熱の稀薄をカムフラージュしている、おびただしい亜流とは異なる。失敗はむしろ詩人業平の光栄であろう。業平の歌が伊勢物語の核心となり、彼の名が今も何と



なく懐かしい響きで想起されるのは、その作品に含まれたカオスの力である。当時の人々はこのカオスに含まれるウィットの新しさに眼をみはったが、同時にその底に漂う切実な愁いに心を打たれた。歌はこのようにして飛躍的に複雑微妙なものとなり、それとともに、急速に陰翳を増す王朝貴族たちの内面を代弁する機能を備えるに至った。

「世の中に」の歌とその作者について、もう一つ触れておきたいことがある。それを桜という素材の新しさをめぐって説こう。桜が梅に代って貴族たちに愛されるようになるのは、業平の時代であった。万葉歌人は梅を外來の珍花として賞で、国文学者山田孝雄（『桜史』）によれば、集中梅花の詠百十首、桜はその半ばにも満たない。平安時代に入って、嵯峨天皇が禁苑「神泉苑」にしばしば「花宴」を催して文人に詩を作らせ、仁明天皇が南殿（紫宸殿）前庭の梅が枯死した際代りに桜を植えさせたことなどが、梅より桜への推移を決定した。古今集に至って、梅十八首に対して桜七十首と、比重は完全に逆転する。してみれば、渚院の桜狩は、歌もさることながらその行為自体があたらしい王朝のみやびの創出でもあった。

しかし桜を賞でこれを歌った功を、業平ひとりに帰することはできない。なぜならたとえば古今集には、「世の中に」の歌の直前に、

染殿のきさきのお前に、花瓶に桜の花を挿させたまへるを見てよめる